

『見えないもの』に魅せられて 放射線科の世界

放射線科を舞台にした医療コミック『ラジエーションハウス』。テレビドラマ化されて大きな注目を浴び、高視聴率を記録した。その背景には、ある診療放射線技師の、仕事への誇りと強い使命感があった。

放射線科の世界を知ってほしい

東京大学大学院総合文化研究科特任助教の五月女康作氏は、診療放射線技師になって2〜3年目の頃、高校時代の友人から言われた一言を苦笑まじりに思い出す。

「僕が放射線技師をしているって言うたら、『あー、病院で写真をパシャパシャと撮る人ね』って言われたんですよ」

五月女氏は大学卒業後、筑波メディカルセンター病院に勤務。技術を身につければつづけるほど病気を写し出せるこの仕事の奥深さに気づき始めたときだった。

「確かに間違っていないのですが、なんか悔しかったですね。画像診断用の写真をボタン一つでパシャッと撮るだけが仕事ではないんです。診療放射線技師は、見えないものを見えるように工夫し、そのために日々知識と技術を磨いている。患者さんの病気を見つけたいという強い使命感と、努力の積

み重ねがあるんです。そんな世界を彼や、もっと多くの方に知ってもらわなければならない。そして、放射線技師という仕事に憧れないと、未来を担う人材が続いていかないのでないか。あの一言を機に、そんなことを考えるようになりました」

数年後、そのヒントを得る出来事があった。五月女氏はMRI(核磁気共鳴画像法)のスベシヤリストとして、宇宙飛行士の向井千秋氏が関わるプロジェクトに参加。そこで高い評価を受けた。

「棒グラフを縦方向に伸ばすように積み上げてきた知識と技術を、宇宙という横方向に展開することで、医療業界を飛び出し、『世間』という広い世界から評価を得られたことに手ごたえを感じました。それと同時に、放射線科の仕事は多くの方に知ってもらわなければならない、横方向に展開すればよいのだと気づいたんです」

や重要性を話し続けるうちに、企画が動き出した。2011年頃のことだ。

見えているものすべてではない

五月女氏が監修役となり、編集者の音頭で抜擢された、同年代の才能溢れる作家と漫画家でチームを結成し、4つのキーワードを決めた。「画像診断」「放射線科医・放射線技師という職業」「働く女性」、そして、「見えないものを見る」だ。特に4つ目のキーワードには、社会へのメッセージを強く込めている。

「画像診断は、外からは見えない体内の病気を透かして見るわけですが、実は単に画像を見るだけでは分からない病気が隠れていることもあるんです。また、放射線科の仕事や診断の流れも患者さんからは見えません。つまり、見えているものがすべてではない、と作品を通して伝えていたと思います」

主役の技師の表現にもこだわった。「放射線科医と技師は対立するものではなく協力しあうもの。主役であっても技師だけが目立つ表現にはせず、両方にスポットライトを当てたかったんです。そのために何度も何度も議論を重ねました」

これらのメッセージは、画像診断のシーンはもちろん、医療を支えるメーカーや技術者、製薬会社とその営業担当者や、まだ広く知られていない疾患、患者とその家族の苦悩などを通じて、ストーリーの随所で感じることが出来る。

変えろ』という言葉にも出合った。人を直接変えることはできないが、周りの環境を変えれば人はおのずと変わる。他から見た技師のイメージを変えるにはどうしたらよいか。友人や世間への橋渡しになるもの、環境を変え得るものは何か。そこで思い浮かんだのが、漫画という方法だった。

「僕たちが抱く憧れの職業イメージって、漫画やテレビドラマの影響が大きいと思うんです。漫画ならきっと、多くの若者に響くはずで、さらにはドラマ化されれば根付いてくれると思います」

幸運だったのは、五月女氏の高校時代の同級生に、漫画雑誌で有名な出版社に勤める編集者がいたということだ。五月女氏は持ち前の行動力を発揮してすぐに連絡を取り、交渉しかし、最初はまったく興味を示してもらえなかったという。それでもあきらめず、何年も粘り強く仕事の面白さを

を受け取っていると思っているんです。長年かけて開発された優秀な装置を使い、知識と技術を駆使して見えなかった病気を写し出し、より美しい画像として撮影し、放射線科医にバトンを渡す。そのためには、診療放射線技師には画像に対する執着心が不可欠なんです」

その強い想いを、知る旧友も五月女氏のことを「願いや想いを画像にできる人」だと表現する。まるでラジエーションハウスの主人公、五十嵐唯織のようだ。実際、国際学会で「The Da Vinci Award」を受賞している数少ない日本人受賞者の一人だ。

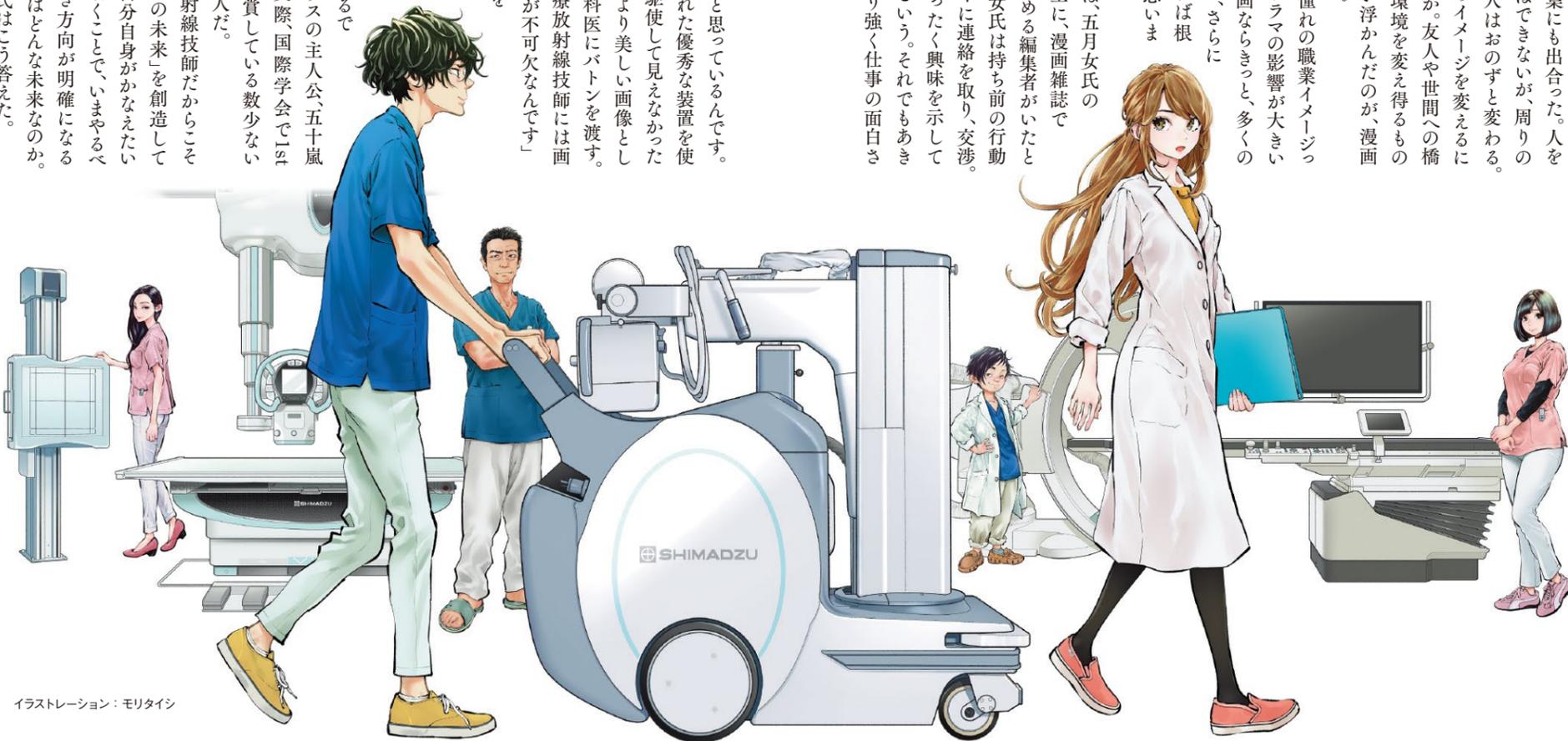
今後は、診療放射線技師だからこそ描ける「放射線科の未来」を創造していきたいと語る。自分自身がかなえない未来を具体的に描くことで、いまやるべきことや、進むべき方向が明確になるからだ。では、それはどんな未来なのか。熟考の末、五月女氏はこう答えた。

「いまは明言を避けたいと思います。漠然としているものを、ていねいに言葉を選びながら言語化することが好きですし、それをしないと前に進んではいけないと考えています。中途半端な状態で無理やり言葉にしてしまうと、その言葉が進む道になってしまからです。もう少し自分の中でイメージを温めてブラッシュアップし、その言葉で、未来への第一歩を踏み出したいと思っています」

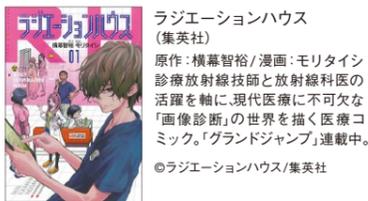


五月女 康作(さおとめ こうさく)

東京大学大学院総合文化研究科進歩認知科学研究センター特任助教。筑波大学大学院人間総合科学研究科疾患制御医学専攻医学博士課程修了。診療放射線技師。博士(医学)。現在の研究分野は、脳科学とMRI画像技術学。漫画『ラジエーションハウス』(集英社)、テレビドラマ『ラジエーションハウス〜放射線科の診断レポート〜』(フジテレビ系列)監修。



イラストレーション：モリタイン



ラジエーションハウス (集英社)
原作：横幕智裕 / 漫画：モリタイン
診療放射線技師と放射線科医の活躍を軸に、現代医療に不可欠な「画像診断」の世界を描く医療コミック。「グラウンドジャンプ」連載中。
©ラジエーションハウス/集英社

ラジエーションハウス〜放射線科の診断レポート〜 (2019年4月よりフジテレビ系列にて放映)



脚本：大北はるか / プロデュース：中野利幸 / 演出：鈴木雅之、金井紘、野田悠介、関野宗紀 / 制作著作：フジテレビジョン
画像提供：フジテレビジョン